

高嶋琉璃は勇者である

夜明けの月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高嶋琉璃は10歳の頃、大赦からお役目を言い渡され、『勇者』として戦うと決める。それから二年後、彼女は友人であり仲間でもある三人の勇者と共に向かいくる敵、バーテックスを迎え撃つ。

これは、神樹様選ばれた彼女達『勇者』が紡ぐ物語であり、おとぎ話。

——いつだって、神に選ばれるのは無垢な少女達だ。

そして多くの場合、その結末は――

※作者はゆゆゆを完全に理解しているわけではないので、時々自己解釈だったり思い違いだったりがある可能性があります。ご了承ください。

目次

第1話	たかしまるり	1
第2話	ういじん	13
第3話	ともだち	26
第4話	がっしゆく	40

第1話 たかしまるり

私、高嶋琉璃は生まれてから何の変哲も無い生活を10年、何不自由なく送ってきた。友達、家族、親戚にもこれといって嫌いな人はおらず、皆優しく接してくれた。話していたことも、起こしていた行動も、私が見ていたものは全て本音から出るものだろうと思っていた。

……………今この時までには。

私がいるのは、『大赦』という神樹様を祀っているところ……だと思う。何も知らされずにお母さんに連れてこられたから、それが合っているかどうかは分からないけれど。そこについて大きな部屋に通されて第一に言われた。

「高嶋琉璃さん、貴女は神樹様選ばれ、お役目を果たす勇者となる義務があります」

よく、わからなかった。お役目……というものの自体がなんだか分からないし、そもそも『勇者』という言葉はお伽話や小説でしか聞いたことがない。それに、いきなり連れてこられて義務なんて言われても、一切ピンとこない。

私が首を傾げて突っ立っていると、白装束というか白い着物のような服装をしたお母さんは、慌てた様子で私を正座させた。なんでも、ここは神樹様の近くだから無礼を働いてはマズイらしい。

周りには知らない大人ばかりだから、少しぐらい緊張はする。私は人の前に出るような人間じゃなかったから、多少人見知りになっっているのかもしれない。

だから、その慌てた姿はいつもの姿を思い出せて少しは安心できた。

でも……ここではお母さんに迷惑をかけるわけにはいけないと、正座のまま耐える。

「これは決定事項です。神樹様選ばれた貴女は、勇者としてお役目を果たさなければなりません。いいですね？」

いいわけがない。なぜ勝手に決めつけられなければならないのか、私の人生は私のものではないのか、そういう疑問が浮かび上がって来る。

だけど、そのお役目というのはかなり名誉なことらしく、断るということ自体ありえ

ないらしい。

……このことをお母さんはどう思っているのだろう。誇らしく感じているのだろうか。自分の子がお役目を選ばれるという事を。

ふと、思った。思ってしまった。

『そうだったら……お母さんは、家族のみんなは喜んでくれるだろうなあ』

そして私は、お役目を受ける事を決めた。

これが、私の『勇者』としての始まりだった。

*
*
*
*
*

カーテンから差し込む光が目元にあたり、眩しきで眼を覚ます。私は上半身を起こし、不意に襲った眠気を振り払うように伸びをする。

お役目を言い渡されてから、一年が経った。私は今、小学六年生になった。

勇者のお役目は……まだ果たしてはいない。というか、個人訓練ばかりだった。他の勇者もいるらしいが、会ったことはなく、ただ一人で淡々と訓練していた。側にお母さんはいたけども。

寝ぼけ眼を擦りながら一階に降りると、そこには同じように眼をこすっている二つ上の兄、空助がいた。

「お、起きたか琉璃」

「……………うん、おはよう兄ちゃん」

ふああ、と欠伸をしながら応えると苦笑いで返された。…………何かおかしいことあったかな？

「んな大きな欠伸して……もしかしてまた夜更かしか？」

「昨日は早く寝た。けど眠い…………ふああ」

「お前の早く寝た、は信用できないからなあ…………。ま、体壊さない程度にしとけよ」

兄さんはひらひらと手を振りつつ、洗面所の方に向かった。

私と兄ちゃん、それと下に双子の妹と弟がいるのだが、全員朝の行動が違う。

兄ちゃんは先に身だしなみを整えてからご飯を食べて学校に行っている。

妹と弟はお母さんに起こされるまでは寝ているし、起きてからもつきつきりじやないといつの間にかそこらへんで寝ている。

私かというと、朝起きて朝食をとってから全ての用意を済ませる。兄ちゃんとは全く逆に行動している。

それにしても眠すぎる。昨日は本当に早く寝たはずなのに……疲れがたまつてたのかな。

「あら琉璃、おはよう。ご飯は机の上に置いてあるからね」

リビングに突っ立っていると、キツチンの方から声が飛んで来る。

優しく、聞き慣れた声。私のお母さん、高嶋結衣の声だ。

キツチンの方に視線を向けると、ニツコリと笑みを返してくれた。私は、うんと応えて席に着く。

机の上にあるのはいつも通りの食事。お母さんが作ってくれた暖かい食事。

お母さんの作る食事すべてが私の大好物だったりする。

私は今日もそれを味わいつつ食べ、いつも通り学校に間に合うギリギリの時間に家を

出るのが良かった。

* * * * *

神樹館小学校。

私の通う学校。この5年間ずっとそこで勉学に励んだ……はず。覚えているのが本
を読んでいたことしかないのは気のせいなはず。

で、今の私というと、

「お、琉璃。奇遇だな！」

「あ、三ノ輪さん。奇遇だね」

「だーかーらー、銀でいいって言ってるのに……」

クラスメイトである三ノ輪銀と並んで走っていた。

原因が、朝食に時間をかけすぎている事だけど、三ノ輪さんがいつも私に遭遇する理由は今でもわからない。

多分、三ノ輪さんにも何か理由はあるのだろう。

三ノ輪銀。

彼女は私の所属しているクラスの女の子で、セミロングくらいの灰色っぽい髪を後ろで束ねているボーイッシュな子。

小学校に通い始めて2年で知り合い、そこからずっと仲良くしてくれている。

最初は苗字で呼ばれていたのだけど、次第に名前で呼ばれるようになっていた。……
たまに名前で呼ぶようになったけど、基本的には苗字呼びだけだね。

「そろそろ名前で呼んでくれないじゃないか！」

「気が向いたらね」

「ちえ〜」

「ほら、早く行くよ銀」

走る速度を上げて、三ノ輪さんもと銀の前に出る。普段苗字呼びをしているから、たまに名前ですんだ時の反応が面白いから、これをやめるのはもうちよつと後になりそうかな。

「はあい……つてちよつとタンマ！今名前ですんだよね？ね?!」

「さて、何のことやら」

「いい加減からかうのやめて、ちゃんと名前ですんでくれよー!」

私達の朝はいつもこんな感じで賑やかだ。でも、この日常は私にとってなくてはならないもの……なのかもね。

なんて思いつつ、走る速度を上げて行くのだった。

* * * * *

結局銀と一緒に学活に少しだけ遅れた。学生名簿で頭を軽く叩かれるだけで済んだけど、それがまた絶妙な痛さだった。銀はわめいていたけど。

席に着くと横にいる女の子、鷺尾須美が訝しんだ目で見てくる。

これには苦笑いで返すしかない。だって話すと絶対にお説教確定なんだから……。あれは足に効くからあまり受けたくない。

前に座った銀はというと、他の子に遅れた理由を聞かれていた。「六年生にもなると、色々あるんさあ」と応えながらランドセルを開けていたけど、中身空っぽだったのは後ろに座っている私には丸見えだった。

それに連動して「げっ」と悲鳴みたく声を上げているのも。

「じゃあ、今日の日直の人」

「はい。起立！」

おっと、今日の日直は鷺尾さんらしい。これは朝の挨拶もちゃんとしないとダメだ。あとで叱られ……いや、遅刻した時点でそれは確定事項だった。

「気をつけ、礼。神樹様に、拝」

先生に礼をし、振り返って神樹様に手を合わせる。その際に感謝の言葉を添える。『神樹様のおかげで今日の私達があります』と。

「神棚に、礼。着席」

私はランドセルから教科書を出す。銀はまだ諦めてないのか、ランドセルを逆さまにして降っている。

教科書を机の上に置いた瞬間、横に未だ立っていているクラスメイトが視界に映る。

おかしい、鷺尾さんの声が聞こえなかったのかな。

その異変を感じているのは私だけではなく、銀と鷺尾さん、そしてその隣でキョロキョロしている乃木さんの三人もだった。

私達は知っているこうなった場合、この後どんな事が待っているのか。

「これって……」

三人とも不安がっていると、遠くの方から鈴の音が聞こえてくる。周囲が止まっているのに、鈴の音が聞こえる。事前に教えてもらっていた事とそう変わらない。

「来たのね。私達がお役目を果たす時が……」

そう、これはお役目を果たす合図のようなもの。外からくる敵を追い返すための戦いの知らせなのだ。

「お、おおう!?なんか外から光が!」

「え？」

銀が驚いたように窓の方を見る。それに釣られ、視線を移すと窓全体が光に包まれていた。外が光っているのか、光が教室を満たす。視界が真っ白になり、何も見えなくなる。

そこから、私は一瞬だけ意識を失うのだった。

* * * * *

神世紀二百九十八年。

これは、四人の勇者の物語。

神に選ばれた少女達のお伽話。

いつだって、神に選ばれるのは無垢な少女達である。
そして多くの場合、その結末は――――

第2話 ういじん

光が収まり、目を開くとそこは別世界だった。

市街地は見る影もなく、私達がいたはずの学校も跡形もなくなっている。

「これが、樹海化……」

「初めて見たあ……」

樹海化。

神樹様が『向こう』から、外からくる敵を迎え撃つために作り上げた結界『樹海』を作り出す事だ。

話は聞いていたのだけど、ここまで見事なものだとは……流石に予想外だった。

「お、そうだ。写真撮つとこ写真♪」

「三ノ輪さん、遊びじゃないのよ」

「分かってるってー」

「全然分かってるようには思えない……」

「諦めて鷲尾さん。銀はこういう時、とことん人の話を聞かないから」

「……琉璃、お前こういう時グサグサくるのな」

「どうしたの三ノ輪さん、何か間違ったこと言ったかしら？」

「鷲尾さんの真似してる風に聞こえるんだけどさ、本気でやめてくれ。なんかこう、背筋がゾワつときた」

……それはどういう意味なのよ。

ジト目で銀を睨むがまだ悪寒とやらで背中がむず痒いのか、私のことを見る余裕もな
いらしい。そんなに似てないか、あれ。

いや、そういう問題ではないとは思うけど。

「あつーあそこ見て見て〜。なんかいるよ？」

その場にいた女の子、乃木園子がマイペースなような、それも気の抜けるような声
で指を指す。

そこにあつたのは、樹海化した瀬戸大橋だった。

海の上に木の根のようなものが組み合わさって一本の大きな橋になっている。

そしてそこを通るこの世ではあり得ないような異形の種。浮きながらゆつくりと移
動し、橋を渡っていく。

あれが……バーテックス。神樹を狙い、この世界を壊そうとする私達の敵。

「そんじゃ、パパッと終わらせよう」

銀は携帯を取り出して勇者のアプリを起動する。

私達がお役目を果たす『勇者』となるためには、端末にある勇者アプリを起動して祝詞を唱えなければならない。

しかし、その祝詞を唱えるだけであのバーテックスに立ち向かえるのだ。それなら安いものだと思う。

「アメツチニ キュラカスハ サユラカス」

「カミワガモ カミコソハ キネキコユ キュラカス」

「ミタマガリ タマガリマシシカミハ イマゾキマセル」

「ミタマミニ イマシシカミハ イマゾキマセル」

そう告げ、スマホの真ん中に表示されてる花のマークをタップする。

祝詞を告げ、そこをタップするだけでバーテックスに対抗するための勇者になるのだ。

そんなことを思いつつも変身が進み、橙色の縦線があしらわれたインナーが体を包み込み、その上から袴のような服装を着込み変身が終わる。

橙色の袴という、なんとも自分にしては明るい色なのだが、これが私にとって最適なのだという。

……そこはもう仕方ないかと割り切ったけど。

「おお、実践だ！」

「合同訓練なかったもんね〜」

他の子達も変身が終わったらしく、樹海を見渡しながら話をしている。

流石に緊張感がなさすぎじゃないかな？このお役目には世界の命運がかかっている。

「敵がお告げより早く出現したから、する暇がなかったものね」

「と、なるとアレが大橋か」

「そうみたいね。あそこを抜けられると……」

「撃退できなくなっちゃうもんね」

「そうと決まれば、早速突撃！」

話してる途中でいきなり飛び出して行く銀。それに「私も〜」とついて行く乃木さん。

……チームワーク的にこれは全く大丈夫じゃないよね。

その二人を見つつ、呆然と立っている鷺尾さんが目に入ったのでその肩を叩く。

「今は気にしちやダメだから、とりあえずお役目に集中しよう鷺尾さん。怒るなら終わってから怒ればいい」

「……っ、そうね。そうしましょう」

「とりあえずあの二人を追いますか」

私と鷺尾さんはワントンポ遅れて先に進む二人を追いかけた。

*

*

*

*

*

「でつかあ……」

「本当だねえ……」

先行した二人に追いつき、大橋までたどり着く。そこには私たちが勇者となり戦うべき相手、

「こいつが壁の向こうから来た存在、バーテックス」

鷲尾さんのいう通り、目の前にいるのが倒さなければならぬ存在のバーテックスだった。

真ん中に風鈴のような形で青く透き通っており、両サイドを水のような球体に挟まれている。

下の方についている帯のようなものをゆらゆらと揺らしながらゆっくりと前に進んでいる。

そしてなにより、大きい。私たち全員分の身長を足しても比べ物にならない。大型トラックよりも大きいんじゃないだろうか。

そんなことを考えていると、バーテックスがこちらに気づいたのか、バーテックスの真下の樹海の木が赤黒く変色し始めた。

これが侵食……。進めば進むほど現実世界に悪影響を及ぼすと呼ばれるもの。

ということとは、もう悪影響が始まりつつあるってことか！

「気づかれたなら……先に倒す!!」

「ちよ、三ノ輪さん!!」

「いっくよー!!」

「乃木さんまで!?!」

「チームワークのチの字もないね、このグループ……」

だが、相手には気づかれている。侵食も始まっている。退くことは許されないし、それをよしとしない自分がいる。

なら答えは一つ。

「鷲尾さん、銀と乃木さんに続くよー!」

「えっ、でも……」

「こういう場合止まってたらやられる。気づかれてるんだから、計画も立てる暇ないし」

「…そうね、わかった」

突撃した銀と乃木さんに続くこうとする。

だけど、その足は一瞬にして止められた。

「な、なんだこれ!?!ちよ、まっ!?!」

「ミノさん!え、うわあ!?!」

銀はバーテックスから出された泡に飛んだ勢いを殺され、空中から樹の根に落ちる。銀に続くこうとしていた園子には、右側の水の球体から高水圧なレーザーを射出する。それをかわすのにしくじり、足場から落ちてしまう。

「二人とも!」

「鷲尾さんは矢で攻撃して。私が回り込む!」

私はバーテックスの後ろを取ろうと回り込もうとする。が、二人がいきなり攻撃を食らってしまったことにより、焦って行動を間違えた。

バーテックスは左の球体から高水圧レーザーを撃ち出す。

足元の樹の根を思いつき蹴り、なんとかそれをかわすが勢い余って体勢を崩す。

ここで失敗るかな、普通……。

「高嶋さんまで……。なら、私が……!」

大丈夫です。私はただ単にドジ踏んだだけです……めっちゃ恥ずかしい。

そんなことはつゆ知らず、須美は弓の弦を限界まで引き、力を溜める。矢の先に花のような模様が現れ、徐々に花卉の色を増していく。

それが青く色がつくと、その花の輝きが増す。須美は即座に手を離し、矢を放つ。

だがその矢はバーテックスの出した泡に絡め取られ、届くことなく墜落する。

「そんな……!?!」

その泡は矢を絡め取るだけでなく、多くの泡が須美を襲う。

須美は泡の勢いに耐えきれず、立っていた足場から下の樹の根に落ちてしまう。始まったばかりだが、満身創痍ではない。だが、これでは勝ち目がなさすぎる。とうか連携が取れなさすぎて攻めようがない……。

「……どうしよう、八方塞がりだこれ」

私はただ立ち尽くし、神樹の元へと進むバーテックスをみているしかなかった。

*
*
*
*
*

鷲尾須美 side

私達の初撃は全て不発に終わった。しかも、敵が強すぎて対策も思いつかない……。どうしよう……。これ以上進んだら神樹様が……！

考えなくちゃ……。私が考えなくちゃ……！

でも、三ノ輪さんは強力だけど近づけない。高嶋さんは機転がきくけど、それを活かしかれる気がしない。乃木さんは……。どう扱っていいかわからない。

どうしよう……。どうしたら……！！

「危ない!!」

「え、きやつ!?」

考えに耽っていると、三ノ輪さんと高嶋さんに押し倒される。

何をするのかと抗議しようとしたが、その二人の頭上をバーテックスの泡が通り過ぎ

ていくのが見える。

助けてくれたんだ……………。

「ぼうつとしてると危ないぞ」

「そうそう、ここは戦場なゴボツ!？」

「た、高嶋さん!？」

頭を上げた高嶋さんに泡が当たる。その泡は高嶋さんの頭をすっぽりと包み込んでしまう。

「ちよ、おい琉璃!？」

「が、ゴボツ、ガボツ!？」

「この……………泡の弾力が……………!？」

すぐさま顔に張り付いている泡を破ろうと押し引つ張ったりするが、弾力が強すぎて全く破れる気配がしない。

「わっ、大丈夫るーりん?？」

そこに乃木さんが来るが、事態は変わりそうにない。

私と三ノ輪さんが弾力の強い泡と悪戦苦闘を強いられていると、

「ーーッ!？」

高嶋さんの目がカツと開き、一心不乱に泡の内部の水を飲み始めた。

……バーテックスって体内に取り入れても大丈夫だったっけ？

その姿に呆然としてみると、全て飲み終わった高嶋さんは深く息を吐く。

「……ふふ、こんなもの勇者となった私にはどうってこと………気持ち悪っ」

「おおおお、凄いるーりん！お味は？」

「最初はサイダーで次にウーロン茶。最後にはおしるこの味がした……吐きそう」

「うええ、気持ち悪そう……」

「……そりや災難だったな琉璃」

「………はっ！そんなことよりバーテックス！」

「私が未知のものを摂取したことをそんなこと呼ばわりって……泣きそう」

「わわっ!?!ごめんな「嘘だけど」さい……えっ嘘!?!」

「まあそんなことよりバーテックスだよね」

「くくくっ！高嶋さん、あとで覚えておいてください！」

「まあまあそこまで怒らなくても」

「こんな時までからかうなんて……信じられない！私がいっかつかりしないとダメのよう
ね。」

「さてと、緊張もほぐれたところであれの処遇よね」

「ああ、あいつはヤバイ。近づこうにも近づけないし」

「だったら私が……!」

「待て待て落ち着けて!」

「でも、このままじゃ!」

私達が言い争ってる中、乃木さんは一人考え込み、あつと声を漏らす。

「ピッカーンと閃いた!」

……何を閃いたんだろう、と三人で首を傾げながら乃木さんに閃いた案を聞く。

連携してバーテックスを倒すための案を。誰も犠牲を出さず、あの化け物を倒せる術を。

「……一か八かの勝負だが、やってみる価値はありそうだな」

「ま、やらないよりやった方がいいよね」

「乃木さんが言うのなら……」

「よし、決まりだね」

そして、やられっぱなしだった私達は反撃の狼煙を上げた。

第3話　ともだち

バーテックスは未だふよふよと下部にある尻尾のような帯を揺らめかせながらゆつくりと進んでいる。

須美はその巨体向けて矢を放つ。

矢は先程のように遮られることなく青く透き通る体に突き刺さり、小さく円状の衝撃波でその体を削る。バーテックスはその衝撃により、須美達がいる方向へと向き直る。

「こつちに気づいたよ〜」

「じゃあ、手筈通りに……行くよ!」

琉璃の合図で四人は同時に走り出す。バーテックスはその接近を許すはずもなく、小さな泡で進行を妨害しようとする。

「園子!」

「合点承知だ〜」

四人は足を止めて園子の側に寄る。園子は槍を前に携え、槍の形状を変形する。

槍の穂先が紫の色を放ち、薄く広く展開され傘のような形状に変わる。

「この槍、盾になるんよ〜」

傘もとい盾に変わった槍はバーテックスから放たれた泡を全て防ぎきる。バーテックスもそれだけで終わるつもりはなかったのか、右側にある水の球体からレーザーを射出する。

それも盾で防ぐが、勢いが強く園子だけでは踏ん張りきれない。須美、銀、琉璃は槍の持ち手の余っている部分を持ち、園子とともに支える。

「ぐうううううううう！」

「勇者は、根性……！押し返せえ!!」

銀の声で足に力を入れてゆつくりとだが押し返す。だが、それでも水圧の方に押されている。

「オーエス！オーエス！」

「「オーエス！オーエス！」」

「ほら、須美と琉璃も！」

「ええっ？」

「……ええ」

「オーエス！オーエス！」

「「「オーエス！オーエス！」」」

そうやって押しているうちに、レーザーの水圧が徐々に弱まり、最後にはなくなる。

その瞬間を四人は逃さなかった。

「よし行くぞー！」

「突撃〜！」

銀、須美、園子は空中に飛び上がり、琉璃は体勢を低くして前へと走る。

銀は園子の槍に掴まり、須美はバーテックスの追撃に対応するため矢を構える。

「須美！頼んだぞー！」

「ああ、もう狙いにくい……っ！」

「来たぞー！」

先ほどのような泡がもう一度迫ってくる。それにタイミングを合わせて須美が矢を放つ。複数撃った矢は全弾泡に突き刺さり破裂する。

「三ノ輪さん！」

「思いつきりいくよ？」

「構わない！園子やれ！」

「分かったら。うんとこしよー!!」

園子が槍を振り回し、銀を投げ飛ばす。そのままいけばバーテックスまで辿り着き、銀がとどめを刺す……はずだった。

バーテックスは左の水の球体からレーザーを射出する。それはまっすぐ空中を進む

銀へと向かいー

「やっぱ反撃するよな……琉璃！」

「あいあいさーつとー！」

銀は下の方に手を伸ばし、いつの間にか下にいた琉璃の持つ薙刀の柄を掴む。

なぜ、琉璃が下にいるのか。

その理由となる園子の作戦はこうだった。

銀が接近できればあれば倒せる。けれど妨害にあつてばかりで突破がままならない。

ならば攻撃がやんだ瞬間に空中から仕掛ければいい、と言う強引な策だった。

だけど、もしその時に追撃がまた来たらどうしようもないから、その対策のために琉

璃が下にスタンバイするということになっていたのだ。

この策での琉璃の役割はかなり重要なものだった。追撃を銀が必ずかわし、再度上空

へと打ち上げなければならぬ。

かなりの手さばきと力のいる役割だった。

琉璃は銀がバーテックスの攻撃をかわしたことを確認すると、間髪入れずに銀を上空

に打ち上げる。

「飛んでけ打ち上げ花火もとい銀！」

「いや、なんだその掛けgうおあ!？」

銀は変な声を上げながら体を襲う浮遊感に耐える。

あんにやろう……やつてくれたなあ……、と琉璃を恨めしく思いながら。

「それは後でいいとして……先にお前だ。覚悟しろよバーテックス！」

銀は斧を構えて落下する。銀の体はそのまま右の球体に激突し、球体はその形を崩す。

球体を崩して樹の根に落ちるが、着地し、すぐさま飛び上がる。

今度は下からバーテックスを刻んでいく。

輪郭が赤く輝き、斧から炎と花卉が吹き荒れる。斧はバーテックスを蹂躪する。

球体も、下部でゆらゆらと動いていた帯も、風鈴のような本体も、全てを切り刻んでいく。

そして勢いに任せてガラス体の中にあつた核のようなものを銀が斬りつける。だが、斬れることはなく、逆に銀が樹の根まで弾き飛ばされた。

「どうだア!!」

バーテックスを睨みつけながら拳を突き上げる。

バーテックスは先程のように破損を修復することではなく、空中に静かに佇む。すると、上空から花卉がはらはらと降ってくる。

「始まった……」

「これが…鎮花の儀……」

壁の外から内側へとやってきたバーテックスを壁の外へと還す儀式。ある程度バーテックスにダメージを与える事で行うことが出来る儀式、それが鎮花の儀だ。

要は、この過程を終えることでバーテックスの襲来を防ぎ、撃退に成功したと言えるのである。

「……一見すると綺麗だけど」

正直言つて……なんか不気味。

そう思いながら、琉璃は鎮花の儀が終わるまで花卉が降り注ぐ空を見続けた。

* * * * *

バーテックスとの戦いが終わった翌日、私たち四人を待ち受けていたのはいつものように変わらぬ日常だった。

何かあったかと問われれば、先生から他のクラスメイトのみんなに「四人はお役目があるから」と言うことが説明されたぐらいとしか答えようがないほど平凡なものだった。

ただ、いつも以上に銀は囲まれてしまっているけれど。

「銀ちゃん、お役目ってなんなの？」

「ねえねえ教えて〜」

「それが、これ言っちゃダメって言われてんだよねえ」

「え〜」

……流石人気者。須美と園子なんて見て見なさい。片方寝てるし、須美にいたってはなんか思いつめた表情してて人すら近寄ってないよ。

え、私？ 近く人なんて全くいないけど。だって親友なんていないし。

……さて、帰ろうか。別に友達と呼べる人がいないから寂しくて帰るってわけじゃないよ？ そりや家の方が居心地がいいけど、そんなことは………思つてない、はず………だからね。

帰り支度は既に済ませていたので、そのまま帰ろうとすると、さつきまで黙りこくつていた須美がガタツと勢いよく立ち上がる。

「あ、あのっ！ 三ノ輪さん、乃木さん、それと高嶋さん……良かったらその……昨日の、祝勝会なんて……どうかしら？」

おっと、これは予想外。というかまさか須美からお誘い頂けるとは………どういふ心境の変化なんだろう。

帰ろうと思つていたが、予定変更だ。あの須美が多分勇気を出して私たちを誘つてきたのだ。だったらここでその誘いに乗らないなんてことはない。……もし乗らないと言ふなら、そいつは鬼か悪魔だろうねきつと。

「おお、いいねえー！」

「やろうやろう！」

最初に参加を名乗り出ようとしたら、二人も乗り気なのか、満面の笑みでその提案を呑む。

これ、私が参加する気がなくとも押し切られてたんじゃ……最初から参加する気満々だったけど。

でも、ここで普通に賛成するのは面白くない……なので、ちよつとやってみることにした。

「私も混ぜて☆」

「うわっ……」

「そこ、あからさまに引いた声を出さない」

もうあんな声絶対出さない。

そう誓いつつ、私達は近場で祝勝会なるものができそうな場所へと向かった。

*
*
*
*
*

祝勝会の場所は、安定と信頼のイネスでした。

……………まあ、私ら小学生だもんね。

現在、須美が手紙のようなものを読み上げている最中である。形から入るといのは
こういうことを言うのだろうけど、同級生に対しては少し堅すぎる気がする。

「ほらほら、そんな堅いことは抜きにしてもっと楽に行こうよ。かんぱい」

堅い文言に耐えきれなくなったのか、銀が勝手に乾杯の音頭をとる。その瞬間、須美

がなんか悲しげな表情してた気がする。……そんなにお堅い文言言いたかったの？

「そういえば、鷲尾さんから誘ってくるなんて初めてじゃない!？」

「実はそうなんだよ」

「合同練習も、襲来の方が早すぎてなかったもんね」

「私も興奮してガンガン語りたかったんだよ」

「どうやら盛り上ってるのは誘った方の須美だけではないらしく、銀も園子もだそう
だ。かくいう私も割と気持ち的には盛り上がっている、方だと思う、多分……」

「私も、その……話をしたくて、三人を誘ったの」

「……その話って?」

「うん……。私ね、三人の事、そんなに信用してなかったと思うの。それは三人の事が嫌
いとか、そういうわけじゃないの。……私が、人を頼る事が苦手で」

俯きながら不安そうに話す須美。私達はそれに耳を傾けた。私は特に。

「だって、私も人を頼ろうとしてこなかったから。一人でなんとかできる、なんて思
込んでたから。」

人を頼る事ができるなら、多分勇者になんてなつてなかったと思うし。

「でも、それじゃダメなんだよね……。一人じゃ、私一人じゃ何もできなかった……。三
人がいたから……。だから、その……」

話していくうちに徐々に視線をな斜めにずらす。心なしか、須美の頬がほんのりと赤く染まっているような……。

え、なんか重大発表でもあるの……？

「これから私と……仲良くしてくれますか!？」

……そんな重大なことでもなかったね。

私が須美の隣で安堵していると、向かいにいる銀がニカツと笑う。

「もう十分仲良しだろ」

「えっ……」

「嬉しい〜! 私もすみすけと仲良くしたかったんだ。ほら、私って友達作るの苦手だったから〜」

「乃木さん……」

「というか、私にいたってはもう名前呼びしてもいいかなあ、くらいの仲だとは思ってるよ」

「高嶋さんも……」

「すみすけも同じ気持ちだったんだあ。嬉しいなあ、すみすけ〜」

園子の言葉に、嬉しそうでどこか釈然としない表情の須美は園子に笑顔を向ける。

「あの、乃木さん……そのすみすけって言うのは、何？」

「あー、いつの間にかあだ名で呼んじやってた〜」

「無自覚だったのか……」

おつと銀とハモった。

「嬉しいけど……それあんまり好きじゃないかなあ……」

「じゃあわっしーなは!？」

「もつと嫌よ」

先ほどよりも強い拒絶、まあそりやそんな一昔前のアイドルみたいなあだ名は嫌だな……。私もるーりんとか名付けられたら拒否するし。

「あつ閃いた!じゃあ、わっしーとかどうかな?」

「えー……うーん……まあそれならいいかな」

「わあ!よろしくね、わっしー!」

「よし、じゃあ私のことは銀って呼んでね。鷲尾さんはよそよそしいなあ」

「私は「るーりん!」琉璃でってちよつと待って、乃木さんそれで呼ぶのはやめて」

その後、私達は銀がオススメするジュエラートを食べながら親睦を深めた。

余談だけど、私のあだ名で一悶着あったけど、園子のるーりん呼びが変わることはな

か
っ
た
の
は
別
の
話
。

第4話　がつしゆく

私達が最初の敵を倒してから半月後、二体目の敵がやってきた。

勇者に変身し、そのバーテックスと戦おうとしたわけなのだが――

「だあーっ、身動き取れねえよー」

「風が強すぎるんよー!」

強烈な風に襲われ続けて身動きが取れていなかった。

バーテックスは自身を回転させ、両端にぶら下げた重りのようなもので強風を生み出してこちらの動きを封じていた。手を出そうにも、体がいとも容易く飛ばされる。

どうしたもんか……一か八か特攻、は危険だし……。そうなると接近戦でしか戦えない私と銀はどうやっても戦力外となる。となると須美の矢なのだが、強風で押し流される可能性がある。手詰まり感が半端ないんだけども……。

「あのぐるぐる、上から攻撃すると弱そうなんだけど……」

「……風が強すぎて辿り着けるかどうか」

「じゃあどうすんだよー!」

やられっぱなしなのが気に食わないのか、うがー!と銀が声を上げる。気持ちはわか

らなくはない。さすがにやられっぱなしは私でも嫌だ。

何か、何か突破口は……。

「あつ、須美!？」

私にしがみついている銀が驚きの声を上げる。後ろを見るとそこには風によつて舞い上げられていく須美の姿があつた。

須美は矢を引き、天秤型のバーテックスにその鏃を向ける。鏃の先には花のような模様が浮き上がり、一枚一枚花弁が薄い青に染つていく。

もしかして、あの状況で矢を放つつもりじゃ……!」

「南無八幡大菩薩!」

引き絞つた矢から手を離し、矢を放つ。矢は青い光を放ちながら直進する。

だが、バーテックスの起こす強風の前にはその勢いは弱すぎた。

「そんなん?!」

矢は吹き飛ばされ、空中に放り出されていた須美も遠くへと押し流されていく。

「ツ! 銀、バーテックスお願い!」

「ちよ、琉璃まで!」

私は吹き飛ばされた須美の方へと姿勢を低くして地面を蹴る。須美と同じく強風によつて飛ばされそうになるのを武器の薙刀でなんとか抑えつつ須美の元へと向かう。

強風域の外に出たのか、須美は放物線を描きながら神樹の根に向けて落ちる。
「間に合え……！」

一か八かで強く根を蹴って加速する。

落ちていく須美に向けて手を伸ばし、そして——

*
*
*
*
*

「ゴリ押しにも程があるでしょう」

「「はい……」」

神樹館小学校の教室で私たち四人は担任の先生である安芸先生に叱られていた。

結局のところ、バーテックスは退けることが出来た。須美も無事にキャッチでき、ほぼ無傷で戦闘を終えたのだ。

だが、そのやり方がいかにもゴリ押し過ぎるものだった。

あの後、銀に任せただが、どうやら銀は強風を利用してバーテックスの上へと移動し、そこから武器を振り下ろして攻撃していたらしい。

それでバーテックスが撃退できるものなのかと疑問に思ったが、現にそれがなされているのでなんとも言えない。

「これじゃ、貴女達の命がいくつあっても足りないわ。お役目を果たして、現実への被害も軽微なものですんだのはよくやってくれたけれども……」

「それは、三ノ輪さんと乃木さんのおかげです」

「まあ、今回に関しちや私ら何もしてないしねえ……」

言葉のとおり何もしてない。須美は攻撃しようとはしたのだが届かず、私に至っては接近すら出来ずに園子の後ろに隠れていただけなのだから。

「貴女達の弱点は連携の演習不足ね。まずは四人の中で指揮を執る隊長を決めましょう」

安芸先生は私たち四人にそう告げる。確かに、今回もそうだが前回も完全な連携と呼べるようなものをしていない。前はほぼ思いつきのようなものだし、今回に至ってはゴリ押しだし。

そろそろそういった技能をつけなければ取り返しのつかないことになるかもしれない。

でも隊長か……。言動を見る限りは須美だろうけど、須美は指揮する側ではない気がする。銀は論外……。というか作戦が“ガンガンいこうぜ!”しか選ばなさそうで怖い。そして私はそもそもそんな柄ではない。となると残るはあと一人。

「乃木さん、お願いしてもいいかしら」

「え!?!私、ですか?」

案の定園子に決定した。

今までの戦闘で状況の把握、作戦の立案を担っていたのは彼女だ。おそらく先生はそ

こを見抜いたのだろう。……乃木家が大赦でかなり力を持っているから家柄つてのもあるかもだけど。

「えっと、その……」

「私も、乃木さんが隊長で賛成よ」

「私はそもそも考えるのとか苦手だから、園子なら任せられるよ」

「んじや、私も賛成。猪突猛進な三ノ輪さんと癖の強い鷲尾さんを何とかできるのは、多分乃木さんだけだろうし」

「猪突猛進で……」

「癖が強い……」

「うーん……二人がそこまで言うなら」

どう考えてもこの面子を纏められる気が私には一切ない。園子だからいけると思えるのだろうか。

まあ本音はというと、自分に矛先が向かなかつたからホツとしてるだけなんだけどね。

「そして、神託によると次の襲来までの期間は割とあるみたいだから、連携を深めるために合宿を行おうと思います」

「合宿!?!」

「あの、それなら普通に訓練でいいんじゃない」

「訓練だけでは見えないこともあるだろうから、そのための合宿よ。」

「言い忘れてたわ。隊長の乃木さんの補佐を高嶋さん、お願いね」

「辞退させていただきます」

安心した矢先にこんなこと聞いてないよ先生え……。

結局、私の主張は通らず、隊長は園子でその補佐が私というなんとも腑に落ちない結果は変わることは無かった。

*
*
*
*
*

ちよつとした連休の中、私たちは大赦が管理しているという合宿場所まで来ていた。

先生によると、この合宿中に団結力と仲を深めてもらい、同時に最低限の連携をできるようにしなければならぬ。私たちにはこれまでの戦闘で連携というものが一切なかったことからそういう機会が設けられるのは嬉しい限りなのだ。

がしかし、この訓練が思った以上に難しいしきつい。

「へぶしっ!?!」

盾を展開している園子の後ろを走る銀の顔面にマシーンから放たれたボールが勢いよく激突する。真正面から当たったから絶対鼻痛いよね、あれ……。

「大丈夫くミノさん？」

「だ、大丈夫大丈夫。このぐらいで銀様は挫けたりしない！」

「それ絶対鼻痛いでしょ」

「……………うん、めっちゃ痛い」

話はちよつと前に遡る。

連休の初めの日、私たち一行は専用のバスで合宿所へと来ていたのだが、そこに着くやいなや先生は勇者服を着て砂浜に来てくれといつてきた。それで来てみたら砂浜に多くのピッチングマシーンが十数台置かれていたのだ。

先生はこれで連携を取り、銀にボールを当てさせずに少し遠くに設置してある廃車のようなオンボロの車まで到達させろというのだ。

最初はそんなの楽じゃやない？と思つたのだが、そうでもなかった。ボールが飛んでくるタイミングが毎回変わり、さらに一つ一つの速度もバラバラ。その状態のボールを銀に当てることなく凌ぐというのは難しかった。

今は何回かこなして多少はできるようになつてきたが、必ずどこかのタイミングで穴ができてしまい、そこから銀にボールが当たつてしまう。

そして時間は戻り、先程銀にボールが当たつたので最初からやり直しである。

「もう一回、いくわよー！」

先生の掛け声でピッチングマシンが動き始める。

「いくよ〜」

「おうー！」

「りよーかいっ！」

私たち三人もそれに合わせて廃車に近づこうと前へ走る。

ちなみに須美は弓矢なため、遠距離からの支援で私たちとは離れた場所にいる。

「防ぐんよー！」

「よっ、とー！」

園子が盾で飛んでくるボールを防ぎ、私がリーチが届く範囲のボールを斬る。

銀はボールに当たらないよう躲すか叩ききるかしている。

須美も矢でいくつか撃ち落としているため、捌きやすくなっている。

「よし、ここここまで来れば……！」

「……………」

銀が飛ばうと足に力を入れる。ここから飛ばせば、恐らくあの廃車まで届くはずだ。

だけどさつき後ろから、しかも銀ではない声が聞こえた気がしたのだが気の所為なのか……。

そう思っていると、須美が放った矢が飛んできて……ボールの横を通り過ぎた。
……うーんこれは。

私は薙刀を振り切ってしまっているし、園子に至っては別のボールを弾いているので防ぎようがない。

これもしかして直撃コースなんじゃ……。

「この三ノ輪銀様に、不可能という文字はなゴファア!?」

ボールは見事に銀の顔面に直撃。しかも飛んだ瞬間だったため、銀が後ろに弾き飛ぶ。

「み、ミノさん!?!」

「わあお……あれは痛い」

「他人、事にもほどが……ガクッ」

「ミノさんしつかりして、ミノさん!」

「これは……かなり苦戦しそうだなあ、と内心で思いながら弾きとんだ銀に駆け寄った。